

「Q & A 腹腔鏡下胆嚢摘出術 こんな時どうする？」

滋賀医科大学教授・第1外科 小玉 正智 監修
滋賀医科大学・第1外科 来見 良誠 著

帝京大学溝口病院・外科

山 川 達 郎

滋賀医科大学第1外科・小玉正智教授監修，同・来見良誠先生著，「Q & A 腹腔鏡下胆嚢摘出術—こんな時どうする？」が，このたび，医学書院から発刊された。

腹腔鏡下手術は，minimally invasive surgery の利点から急速に普及しつつあり，こと腹腔鏡下胆嚢摘出術に関しては第1選択手技として定着したと言っても過言ではない。

しかしながら腹腔鏡下手術は，テレビにモニターされた2次元の像を見ながら細径の特殊な鉗子を用いて行う手術であるので，深度感覚，手と目の協調動作，腹腔鏡下に見る解剖に習熟すると同時に，機器の性能とその特殊性などを熟知しておく必要がある。また，臓器触知感覚にも乏しいので，臓器の把持法などにも細心の注意が必要となる。

腹腔鏡下手術のトレーニング方法

としては hands-on training に勝る方法はないが，経験豊かな指導医が少ないため理想的なトレーニングが行われているとは言えない現状にある。日本内視鏡外科学会教育委員会では，腹腔鏡下手術が安全に行われるように，会員には動物やシミュレーターを使つての実地訓練の推奨やテキストブック，その他教育ビデオについての情報を機関誌を通じて会員に提供しているが，短期間にすべてを学ぶことは実際には不可能に近いことである。したがって新しい機器の開発あるいは報告文献に常に気を配ることは無論，先人の経験に耳を傾けることも極めて重要な訓練法である。

開腹手術と腹腔鏡下手術の適応は，個々の症例の病態により使い分けられるのは当然であるが，将来は腹腔鏡下手術の割合がますます増加

していくものと想定されている。本書は基礎編，応用編，適応編，手技編，器械編の5部から構成され，基本術式から，難しい局面におかれたときに至るまでの，著者の対応法が簡潔かつおもしろく書かれている。著者らの豊富な経験から到達した考え方や対処法を学び，それを自分の手術に応用していくことは，極めて効率的なトレーニング法である。また，病態を想定し器具を準備したり，術中に遭遇することが予想される困難な場面への対処法などを念頭に手術に臨めるよう，どこからでも読めるように工夫された点も本書の特色である。肩の凝らない，必読すべき価値ある名著である。

● A5 頁176 図45 1996 定価
3,914円(税込) 〒400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)